

(日置郡吹上町中之里)

位置と環境

遺跡は、東側に金峰山を望む標高約50mのシラス台地に所在する。北側の笠岡丘陵よりのびた舌状の台地で、東・西・南側の三方に谷が入り、谷底には水田が営まれている。

調査の経緯

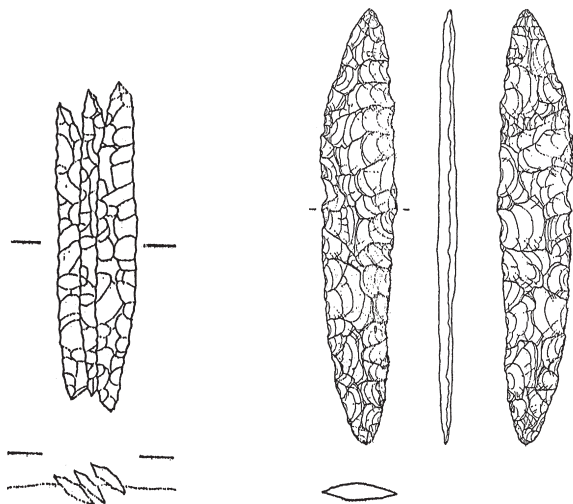
吹上小中原遺跡は、農業大学の果樹園予定地で、平成11～13年（1999～2001年）に本調査を行った。調査は、造成で削平を受ける部分について本調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、IX層から旧石器時代、VIII層から縄文時代草創期、IV・V層から縄文時代早期、III層から縄文時代晩期、II層から弥生時代・古墳時代・中世にかけての複合遺跡で遺構・遺物を検出した。

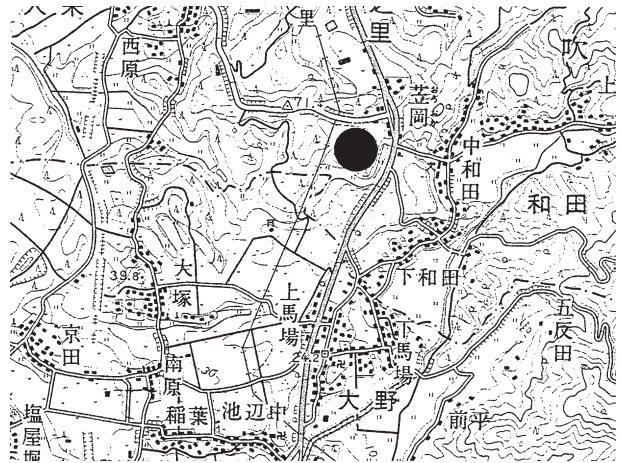
旧石器時代・縄文草創期は、台地の南端部の削平深度が深い部分のみの調査である。旧石器時代は、落とし穴2基を検出し、台形石器や剥片などが出土した。縄文草創期は、集石遺構1基と石鏃製作と考えられるブロックを検出した。

縄文時代早期は、南端部と表土の下がIV層になる北側にのみに出土した。遺物は、前平式土器・石坂式土器・桑ノ丸式土器などが出土したが、前平式土器が主体である。また、前平式土器に伴うものと考えられる。石槍3本がまとめて出土した集積遺構も検出した。これらは長さが16cm前後で、厚さ0.7cmとほぼ同じ形態・石材（ハリ質安山岩）でともに同型であった。縄文時代草創期に見られる石槍によく似



第2図 石槍集積遺構

第3図 石槍



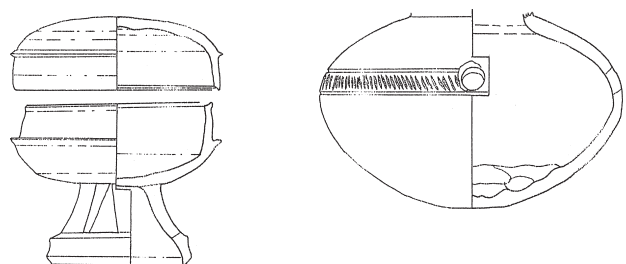
第1図 吹上小中原遺跡の位置

ており興味深いものである。

古墳時代では、土器溜りと竪穴住居跡7軒を検出した。土器溜りからは古墳時代初頭と思われる完形の甕形土器が多数出土し、弥生時代終末との関連性を考慮する資料として貴重である。竪穴住居跡は7軒を検出したが、全てが同時期ではなく集落としてはまばらな状況であった可能性もある。本遺跡から北へ5kmの位置にある辻堂原遺跡では住居跡が104軒と多く、重複している状況が見られた。この違いが何を意味するのか興味深いものである。また、4号住居跡からは南九州特有の成川式土器と共伴して須恵器（坏蓋・高坏・はそう）が出土している。この須恵器は5世紀前半から中頃の須恵器I式で、今後の成川式土器の年代観を考察する上で指針となるものである。

中世では、遺物は少なかったものの、掘立柱建物跡9棟を検出した。2間×3間を主体とするものであるが、2号は1間×1間である。5号は3面に庇をもつものである。また、8号と9号はほぼ同じ位置にあり時期差があるものである。中世の集落は農業開発総合センター遺跡群の中に数か所あり、それぞれがどのような関係を持っていたのかは今後の研究課題である。

(中村耕治)



第4図 住居跡出土初期須恵器